Hiroshima Art Project 08

開催結果報告書

CAMP BERLIN

CONTEMPORARY ART MIGRATION PROJECT

友枝望《民芸品移動》

開催期間　2008年2月2日ー2月10日
会場　旧ベルリン市交通局中央整備工場
総合ディレクター　柳 幸典
協力　エラン・シャーフ
主催　広島アートプロジェクト実行委員会
共催　広島市立大学　ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学
助成　ポーラ美術振興財団　国際交流基金　MartStam Gesellschaft

参加作家

トーマス・アデバー、
　アンドレア・ツィマーマン＋
　エンプファングスハレ
　（コルビニアン・ベーム＋
　ミヒャエル・グルーバー）
エリック・アルブラス＋
　イレーネ・ペツーク
エディン・バイリッチ
マリー・ルイーゼ・ビルクホルツ
福田 恵
古堅 太郎
ニコラス・グリマー
ヒロミ＋シゲ フジシロ
ジリアン・ホルト
入江 早耶
開発 好明
木村 華苗
オフィリ・ラピド
パウリーナ・レオン
ジルビア・ローレンツ
ジルビア・ローレンツ＋
　アレクサンドラ・ジェストロビック・
　オラ・ジャメスディン
増山 士郎
沖中 志帆
大津 達
ダヴィッド・ポルツィン
ソフィア・ポンペリー
流水 彩子
鹿田 義彦
シフン製作所
高橋 知奈美
友枝 望
シラ・ヴァックスマン
カロリン・ヴァハター
ラウル・ヴァルヒ
マティアス・ヴェルムケ
マティアス・ヴェルムケ＋
　ミーシャ・ラインカウフ

キャンプベルリンは、「マイグレーション（移民・移住・移動）」をテーマに掲げ10日間という限定された日程でドイツ・ベルリンにて開催された。

会場となったのはベルリン市交通局の旧整備工場で、旧中工場アートプロジェクト2007同様、産業遺構の建物と言える。会場はトラムや電車を整備していただけあって、奥行が58mもあるとても縦長い空間となっていた。そのダラリと伸びた空間を区切るように建てられた白い壁は、展覧会の重層的なテーマにシークエンスを与え、全体を引き締める役割を果たしていた。

この空間で、グローバルに活躍する招待作家と、広島市立大学芸術学部とベルリン・ヴァイセンゼー美術大学を中心とした若手作家の合計31組が、テーマである「マイグレーション」をそれぞれ独自の表現で展開させた。

「マイグレーション」とは、広島とベルリンに共通する移民との関わりに加えて（広島は戦前、日本有数の移民県であり、ベルリンにはトルコ系を始めとした移民が居住する）、歴史面でいうならば、「戦後」における社会構造の変化、空間面でいうならば、輸送技術の発達による移動時間の短縮、そして情報技術の革新による仮想空間の成立を反映したテーマである。この歴史と空間の変容は、社会だけではなく、文化、とりわけ現代の問題を扱う現代美術に大きな影響をもたらして来た。

今回、キャンプベルリンでは、輸送を支えてきた産業遺構を会場とし、開催期間を 10 日間と短期間に絞る事で、20 世紀後半より発達してきた表現の多様性を引き出した特異な展覧会となった。そこで出品作品の特質を「ライヴ・イヴェント型」、「現地滞在制作型」、「インスタレーション型」、「ドキュメント型」、「メディア型」の５つに分け、プロジェクトの特徴や意義を分析する。

【ライヴ・イヴェント型】

Fig.1

キャンプベルリンにおいて際立った特徴として挙げられるのが、プロジェクトにゆらぎをもたらしたライヴ･イヴェント型の表現ではなかっただろうか。ライヴ・イヴェント型の作品を出品した作家は、参加作家の 5 分の 1 を占め、その中には、一期一会のごとく期間中に一度だけイヴェントを催し、展示物としては何も残さない作家もいた。その場に立ち会えなければ、作品は他の参加者から伝え聞く以外にないのだ。また、通常は彫刻のようなオブジェを会場に展示しているが、制作者である作家と鑑賞者の出会いによって、オブジェが未知の体験へと導くための装置や舞台に変化する表現もあった。他には、儀式のように厳かで、繊細なパフォーマンスも行なわれた。瞬間瞬間で象徴的に生み出されては消えていく身振りや仕草は、いま・ここという一回性の生を強く印象づけていた。

注目すべきは、このような動的な表現を見せた作家は、大半が日本人であり、鑑賞者として関わったのがドイツを主とした多国籍の人々である。それぞれの違う価値観が交差し、それぞれの社会が抱える問題や、文化様式の違いを顕在化させる一方で、感情の共有や共鳴を時として導き出すものであった。

このようなイヴェントが、従来の物質的な美術表現とは異なったアプローチで、プロジェクトに軽快さと、表現の多様性を与えた。そもそも、展覧会としては異例の短期間(10 日間)で行なわれた、キャンプベルリンの特殊性こそが、このライヴ・イヴェント型表現が展覧会の入れ子構造になっている事を再確認させた。

【現地滞在制作型】

Fig.2

ワークショップを通して制作された作品や、現地滞在による作品制作が目立ったこともキャンプベルリンの特徴である。ワークショップとは、体現型レクチャーを通じ、参加者と一緒に作品を作りあげる手法であり、鑑賞者と作り手という分断された境界を壊す作用を持つ。また、滞在制作とはその名の通り、作家が特定の場所に滞在し制作することだが、美術史上、古くから行われていることである。例えば、ルネサンス期の宗教壁画は、作家を既存の建造物まで招致して、その場で制作されたものである。しかしここでの表現は、現地にこもって行う制作を単に示すのではなく、現場の状況や他者との接触を積極的に作品に取り入れ、変化を許容するスタイルを指す。それは制作のプロセスに操舵不能の不確定要素を取り入れ、それを楽しむ事を目的としているのだ。

今回の展覧会では、現地で収集した廃材で会期を通して増築させていった作品や、会場設営の際に使用した部材と人材、そしてその労働の痕跡そのものを作品へと転用した表現もあった。また、ベルリンを活発にリサーチした結果がもたらした表現も少なくない。物理的移動や変貌を遂げる作品は、展覧会の流動性を体現するものとして直接的な効果をもたらした。会期中、作品の変化よって空間が常に新しいものとして生起し続けたのだ。その動的変化をもつ性質により、展覧会そのものが生物の代謝を思わせた。

【インスタレーション型】

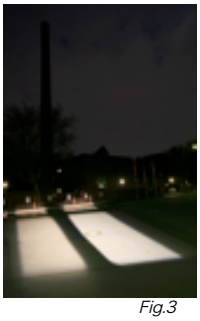
Fig.3

現代の美術において、もはや欠く事のできない表現手段であるインスタレーション。1970 年代以降、作品形態の多様化に対応する形で発展を遂げてきた。作品を単独で見せるのではなく、それを取り巻く空間をも変容させ、作品化する手法であり、設置される場の固有性、展示の一時性を大きな特徴とする。キャンプベルリンにおいても、各々に独自の視点で場の特性をつかみ、自らの作品に生かした展示が見られた。

会場となったのは、ベルリン・ミッテ地区にある旧ベルリン市交通局中央整備工場。20 世紀前半から、ベルリン市内を走るバスやトラムといった公共交通機関の修理・保全の作業を担ってきた。美術館やギャラリーなどのホワイトキューブとは異なり、本来の機能を失った今もなお整備施設である姿をそのままに保っている。車両の点検・メンテナンスに使用する様々な機械が散在し、それらの機械類を作品に取り込む作家もいた。また、広大な

敷地内に存在する煙突や屋内の設備基盤を利用した作品も見られた。これらの作品は、いずれも場の特異性を見出し、その場の判断で実行に移した結果である。

場の特性を生かしたインスタレーション作品が、既存の美術施設ではない閉鎖した工場に新たな息吹をもたらしていた。さらに、即興的なプラン変更を積極的に取り入れたことで、ともすると雑な印象を与えてしまう危険性を孕みながらも、展覧会に程よい緊張感やライヴ感、ある種の迫力を生み出したのではないだろうか。

【ドキュメント型】

ドキュメントとは、文章や証書を含む「記録」の事であり、研究・調査の経過を書き記したものや、その過程で用いられた証拠の品々を意味する。

ここに分類される作品群を更に二分化した際に見えてくるのは、「公」の視点から導き出したものと、「私」の視点から出発した私小説的なもの、この 2 点の異なるアプローチ方法ではないだろうか。前者は、移住にまつわる社会環境を検証し、歴史的背景を踏まえて積極的に社会に介入していく行為がドキュメンテーションによって記録されている作品である。それは、社会に潜む様々な現実を記録することで「伝え、広げ、問いかける」表現と言える。後者においては、個人の記憶や体験に由来する移住が、ドキュメンテーションによって表現されている。それは、自己のリアリティーを「留め、掘り下げ、問いかける」活動であるが、時には社会的見地で検証されるその行為によって、いつしか「私」から「公」に変換されてゆく。両者は、異なる方法を通して、ひとつの共有する問題を追究しているのである。さらにドキュメント型の特徴として言えるのは、概念ではなくリアリティーに基づいた検証及び記録を行うことで、問題に対して正面から取り組んだ作品群だということである。

ドキュメンテーションは、映像、写真、オブジェクト、ドローイング、テキストと様々なメディアを横断して表現されていたと言える。それは、一つの手法に捉われず、「表現したいこと」に最も適した媒体を模索した結果であろう。海を越えて実現された本プロジェクトと同様に、これらの作品群は、現代美術における表現方法の越境を体感させるものだったのではないだろうか。

Fig.4

【メディア型】

映像をインターフェイスとするメディアは現代社会の情報伝達において重要な役割を持つようになった。89 年のベルリンの壁崩壊時、人々が歓声と共に壁に上る姿はブラウン管を通して世界各国に伝わり、2001 年のワールドトレードセンターの崩落は、世界中に生中継で放映された。一方で、メディア機器は、低価格化によって、日常を記録する身近な道具として一般にも普及した。また、メディアは現実の記録や再生だけでなく、CG やアニメといった虚構の世界も生み出した。このように場所と時間、世界と個人、現実と虚構を横断するメディアの力は、現代の社会や文化を変容させつつある。これは、世界中を繋ぐインターネットの環境整備と、PC の演算能力の高速化や、記憶装置の容量の拡大等の技術革新に支えられている。

芸術の世界でも、20 世紀後半より映像が表現手段として取り入れられるようになった。グローバル化に拍車のかかる現代美術においては、映像表現は作品輸送の手軽さと、機材のみでインパクトのある視覚空間を瞬時に作り出せる利点ゆえ重宝される。今回のプロジェクトでも、メディアが得意とする時間の再現性や、機動性を活かしながら、独自の表現が展開された。中でも、会場ではなく、ヴァーチャルな Web 上で発表された作品の存在は、新しいメディアの活用として特筆すべき表現であった。メディアを用いた作品は、我々が、ここにいながらここではないという、新たな場へアクセス出来る可能性を示していた。

Fig.5

＊　＊　＊

以上が、キャンプベルリンの特徴として挙げられる。
最後に、旧中工場アートプロジェクト同様、カフェ「キャンプキオスク」が設けられた点について触れておく。
旧中工場アートプロジェクトにおいてカフェはアーティストが運営し、観客や作家の交流を図るものとして企画された。キャンプベルリンでは、カフェは展示会場のコアともいうべき中央に位置し、長い回廊状の会場で疲れた観客を癒していた。観客や作家がそこでくつろぎ、交流の場になっていた事はもとより、カフェの前の空間で、パフォーマンスや、セレモニー、トークイヴェント、公開対談といった様々なプログラムが毎日行なわれ、人が自然に集まりアートを介して交流する場として機能していた。また、最終日には、広島の名物料理であるお好み焼きと、トルコ移民の象徴と言えるベルリンのドゥナーケバブを融合させた料理「OKOKEB（お好み焼きとケバブの造語）」が来場者に提供された。このように、人が集い語らい合う場所で、カフェとアートイヴェントとがシームレスな繋がりを見せていた事もこのプロジェクトの特徴であった。

Fig.6

Fig.1
ヒロミ＋シゲ　フジシロ
《Lovers' Ceremony "I am in your blue eyes"》　2008

Fig.2
開発好明
《マウンテント》　2008

Fig.3
オフィリ・ラピド
《光のインスタレーション》　2008

Fig.4
トーマス・アデバー、アンドレア・ツィマーマン、エンプファングスハレ（コルビニアン・ベーム＋ミヒャエル・グルーバー）
《仲間はどこから、仲間はどこへ–故郷の感覚–》　2003-2006

Fig.5
ジルビア・ローレンツ
《禁じられた狐》　2008

Fig.6
「OKOKEB」

イヴェントアーカイヴ

沖中志帆《エンドレス 0》

2.01 金 2008

オープニングパーティー

17:00　会場オープン

18:00　主催者挨拶

18:30　《あなたの、そしてあなたの為の食べ物》

高橋知奈美によるフードインスタレーション

19:00　《Lovers' Ceremony “I am in your blue eyes”》

ヒロミ＋シゲ フジシロによる恋人達のセレモニー

21:00　《移動式お花見キット》

シフン製作所による便乗カラオケパフォーマンス

随時　《フェルテン I》

ダヴィッド・ポルツィンによるパフォーマンス開始（不定期）

補足　《ヴァンデルング（ハイキング）》

エリック・アルブラス＋イレーネ・ペツークの壁始動（毎日）

補足　《光のインスタレーション》

オフィリ・ラピドの照明インスタレーション開始（17 時から）

2.02 土 2008

ワークショップ＆トークイヴェント

12:00　「テントを作ろう！　みんなで作るマウンテント！でこぼこ　山型、繋いで、くぐって、休んじゃおー」

開発好明による《マウンテント》のワークショップ

15:00　総合ディレクター柳幸典（広島市立大学）によるトーク

15:30　企画スタッフによる旧中工場アートプロジェクト紹介

2.03 日 2008

イヴェント＆パフォーマンス

13:00　《移動式お花見キット》

シフン製作所によるお花見ツアー

随時　《エンドレス 0》

沖中志帆がパフォーマンスを開始（毎日不定期）

2.04 月 2008

レクチャー＆アーティストトーク

15:00　「TALK! TAKE1!」

鰕澤達夫（広島市立大学）による広島市立大学芸術学部の紹介

2.05 火 2008

アーティストトーク＆イヴェント

15:00「TALK! TAKE2!」

参加アーティストによる作品解説

19:00　《予期できぬこと》

島袋道浩による本場ドイツ料理を食べるイヴェント

2.06 水 2008

イヴェント

15:00　都市交換問題プロジェクト「折鶴問題」

「折り鶴問題」の最終イヴェント

15:00　《エンドレス 0》

沖中志帆によるパフォーマンス

2.07 木 2008

アーティストトーク＋クリット

15:00「TALK! TAKE3!」

エラン・シャーフ（ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学）による批評会

2.08 金 2008

アーティストトーク

15:00「TALK! TAKE4!」

参加アーティストによる作品解説

ダヴィッド・ポルツィン
《フェルテン I》

2.09 土 2008

イヴェント＆アーティストトーク

13:00　《移動式お花見キット》

シフン製作所によるお花見ツアー

15:00「TALK! TAKE5!」

古堅太郎とソフィア・ポンメリーによる対談

2.10 日 2008

クロージングパーティー

補足　《民芸品移動》

友枝望が民芸品の木彫りの熊に手を加え再展示

15:00　「OKOKEB」

広島のお好み焼きと、ドイツのケバブを融合した料理を販売

17:00　《移動式お花見キット- 夜桜茶屋》

シフン製作所によるお花見宴会

開催概要

シフン製作所《移動式お花見キット》

展覧会名　キャンプベルリン
開催期間　2008 年 2 月 2 日（土）- 2 月 10 日（日）
オープニングパーティー　2008 年 2 月 1 日（金）
会場　旧ベルリン市交通局中央整備工場
総合ディレクター　柳幸典
協力　エラン・シャーフ
主催　広島アートプロジェクト実行委員会
共催　広島市立大学　ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学
助成　財団法人ポーラ美術振興財団 POLA ART FOUNDATION　JAPAN FOUNDATION 国際交流基金　MartStam Gesellschaft

参加作家　31 組
総入場者数　10 日間延べ 917 人

主なメディア掲載一覧

新聞

宇城昇「現代美術で交流」、『毎日新聞』、2008 年 2 月 28 日、朝刊 24 面.

雑誌

「KUNST PROJEKT DIE WELTENWANDERER」、『PRINZ BERLIN』、2008 年 2 月、88 頁.

「Kunst und Migration」、『tip Berlin』、2008 年 2 月、99 頁.

「アーティスト訪問　柳幸典」、『月刊ギャラリー』、第 274 号、2008 年 2 月、17–23 頁.

「今年の春、吉島をにぎわせたアート集団が再始動今度はドイツの芸術家たちとのタッグマッチだ！」、『TJ Hiroshima』、第 371 号、2008 年 3 月、62 頁.

ラジオ

「kultur kalender」、kulturradio rbb、2008 年 2 月 2 日.

ウェブサイト

「広島とベルリンのアートプロジェクト報告会–広島・吉島公民館で」、広島経済新聞、2008 年 2 月 15 日.
http://hiroshima.keizai.biz/headline/283/

前岡義人「migration するアーティスト達。」、オンラインマガジン「SHIFT」、2008 年 2 月.
http://www.shift.jp.org/ja/archives/2008/02/camp_berlin.html